

## 結界鎮壇の翁

松岡心平

能のルーツが翁猿楽にあることは衆目の一致するところだが、翁猿楽から能がどのようにして形成されたか、についてはいま一つよくわからない。ましてや、翁猿楽自体がどのように形成されたか、となると現段階では不明としかいいようがない。

もちろん、興福寺の薪猿楽の冒頭に演じられる「翁」が「呪師走り」と呼ばれることから、呪術性の強い翁猿楽が呪師芸の中から生まれたとする説が有力なのは確かである。それでも、寺院の修正会・修二会に密着している呪師芸の中にすでに翁芸があつたのか、翁芸は呪師芸の影響下に猿楽が独自に生み出したものなのか、となるとそこで意見は分かれてしまう。

私は翁芸を猿楽が独自に生み出したものと考えているが、どちらの説を採るにせよ、まずは呪師と翁がどのような点で共通するのかわかる必要があるだろう。

ここではそれを「結界鎮壇」という面から眺めてみよう。

僧侶が勤める本来の呪師が法呪師(はずし)と呼ばれて、一般の呪師と区別されていたことは、院政期の修正会関係の諸記録に明らかだが、その法呪師の主な任務は、「法呪師鎮壇」(『兵範記』仁安四年(一一六九)正月十一日条、円勝寺の修正会)、「法呪師有鎮法等(如例)」(『玉葉』建久二年(一一九二)正月十八日条、蓮華王院の修正会)、「法呪師鎮壇如例」(『勸修記』弘安二年(一二七九)正月八日条、法成寺の修正会)などからも明らかのように、結界鎮壇にあつた。

一方、翁の方でも、翁猿楽の成立(十三世紀頃)以前のテキストに、結界鎮壇にかかわるとおぼしき翁の姿が見えている。

補陀落の南の岸に堂建てて今ぞ榮へむ北の藤波

という『新古今和歌集』(一一〇五)一八五四番の歌は、この集では「此の歌は、興福寺の南円堂つくりはじめける時、春日の榎本の明神詠み給へりけるとなむ」と説明されるのだが、『七大寺巡礼私記』(一一四〇)や『袋

草紙』(一一五八頃)や『袖中抄』(一一八六頃)の説明においては、基壇の造営に直接かわり、歌で予祝する翁の像が鮮明である。

古老伝へて云く、……南円堂を建立さるる剋、壇を築く人夫の中、老翁相交はりて歌を詠んで云く、……件の老翁は率川明神、而して春日大明神の御使として彼の人夫に交はりて此の句を詠むと云ふ。

(『七大寺巡礼私記』)  
或る人の云く、是は南円堂の壇突く時、翁出で来りて此の壇を突くとて此の歌を誦す。春日明神の変化と云々。

(『袋草紙』)  
此歌は南円堂の壇つくると老翁出で来て人夫の中に相交はりて壇を築くとて此歌を詠む。

(『袖中抄』)  
これに対して、基壇の上に主のように居る翁もいる。石山寺如意輪観音の基壇の巖上に現れる翁である。

東大寺大仏建立のために必要な黄金を見つめるため、良弁僧正が金峰山で祈請すると、「近江の国勢多の南に一小山有り。大聖垂迹の処なり。その勝地に到りて祈請せしむべし」と夢の中で蔵王権現のお告げがあり、夢が覚めてそこへ行ってみると、

老翁、大巖石の上に居て魚を釣る。その傍らに小巖あり釣船を繋ぐ。僧正奇んで

問ひて云く、汝は誰が人ぞ。答へて云く、  
我れは是れ当山の地主、比良明神なり。

〔諸寺略記〕(一二七九)

のように、老翁(比良明神)が大巖石の上で釣りをしていた。

この大巖石の上に、石山寺の本尊である如意輪観音がつくり据えられる。そのことは、『三宝絵詞』(九八四)下「東大寺千花会」で、近江の国志賀郡の河のほとりに、昔、翁の居て釣せし石あり。その上に如意輪観音をつくり据ゑて祈り行なはしめたまへとあり。すなはち尋ね求むるに、今の石山の所を得たり。観音をつくりて祈るに、陸奥の国よりはじめて金出で来るよしを申したてまつれり。

と語られることから明らかである。

つづいて『三宝絵詞』は東大寺供養を語る。そこにもまた不思議の翁が現れる。

すなはち年号を改めて天平勝宝と云ふに、寺を供養したまふころほひ、行基菩薩、良弁僧正、婆羅門僧正、仏哲、伏見の翁、樹の下の翁などいへるあとをたれたる人々、或は我が国に生れ、或は天竺より来りて、御願をたすけたり。

それは東大寺大仏建立に際して助力を惜しまなかつた「伏見の翁」「樹の下の翁」の二人の翁たちである。

「伏見の翁」については、『元亨釈書』(一三

二二)がその行動を詳しく語っている。

伏見翁は、いづくの人か知らず。或は曰く竺土より来たると。翁、和州平城菅原寺の側岡に臥して、三年起たず、また言はず。人呼んで唾者となす。時々首を挙げて東方を見る。天平八年、行基法師、婆羅門僧菩提を迎へ、帰りて菅原寺に供を設く。二人甚だ歎ぶ。すなはち箸を執り拍板となし、二比丘互ひに舞ふ。時に翁、俄に起ちて寺に入る。また舞を作し歌ひて曰く、「時なるかな、時なるかな、縁熟するかな」。三人相共に舞ふこと、故旧のごとし。けだし年頃、唾態を作すは此の言を發せんがためなり。時々頭をもたげて東を望むは、東大寺宮構を見んがためなり。

伏見の翁は、直接には基壇にかかわらない。しかし、奈良の西方の岡に三年間も伏して何と言わず、ときどき東大寺造営の進み具合を確かめるように東方を見るといふのは、離れた場所にながらも、いわば遠隔操作的に東大寺造営の土地を鎮め守護する、地の精霊としての翁の姿を示していると見てよいだろう。伏見の翁は、東大寺造営が完成したときはじめて起きあがって菅原寺に下り、東大寺造営・供養の表舞台で活躍した行基や婆羅門僧とともに歌い舞う。裏の守護神として祝禱の歌舞を奏するのである。

『元亨釈書』のこの話自体、翁猿楽から影響を受けていることも考えられるが、それにしても、この伏見の翁の歌舞は、翁舞発生のプロセスの一断面をあざやかに切り取って示すもののように思われる。

ともあれ、これら基壇にかかわる翁たちの姿は、仏堂内の法会にあつて結界鎮壇を司る呪師に代わるものとして登場してくる猿楽の「翁」を予見させてはいないだろうか。

(東京大学助教授)